

あかつき
暁のディベート井戸端会議
～前期の反省と後期の展望～
阿部 亮一、石嶋 宏之、加藤 拓也
(あかつき 暁 メンバー)

1. Introduction

この座談会は2001年8月4日に早稲田大学側のセミナーハウス、きむらやでとり行われた話し合いをスクリプトにおこしたものである。出席者は阿部 亮一さん¹、石嶋 宏之さん²、加藤 拓也さん³である。彼らは「暁(あかつき)」という新設ディベート団体に属していて、親睦会、プロポジションミーティング公聴、ディベート大会のジャッジ等の活動に積極的に取り組むことによってディベート界の健全な活性化を目指している。なお、会員である是澤 克哉さん⁴、波江野武さん⁵、佐藤 俊之さん⁶は今回一身上の都合により参加出来なかった。

座談会は2001年度前期のNDTスタイルの学生英語ディベートに関する感想を述べ、その後2001年度後期の展望を探る形となっている。

この座談会は一介の4年生の意見であり、ディベートに関する1つの見方に過ぎないことをここで断っておく。

編集：田島 慎朗⁷

2. 2001年前期プロポジション「憲法改正」に関して

2-1. Affirmative Case

田島 慎朗(以下田島)：今日は皆さん忙しい中お集まりいただき有難うございます。まず2001年度前期プロポジションに関して反省をしたいと思います。まずCaseに関してなんですけど、はっきりとどこの国がヤバイというケースとか、アジア全体に関しての話とか、いろいろなタイプのものがあつたと思うんですけど。例えばどこの大学のCaseが良かったとかありますか？

加藤 拓也(以下加藤)：多分いろんな反応があつたと思うけど、ポート率が高かつたのはWESA⁸が最後に出していたCaseかな。

田島：どんなCaseだった？

加藤：Observation⁹に特に特定はしていないんだけど、「これから何が起るか分からない状況になる」って言って、せこいだけどリスクは残すぞと。それに対して準備をしよう。後は誰も否定できないことだと思ふけど、On Balance¹⁰で国と人民を守れると。これがなぜ良かったって言うと、NegativeはNegativeで、DAでwarが起ることになってごちゃって、どのみち戦争が起きそうなときに、国がどういう対応をすれば良いかっていうことが出ていたから。ディベーターもラストリバでそういうようなスピーチをしていて、良かったので何度かポートしました。

阿部 亮一(以下阿部)：このCaseが良かったかはおいておいて、Caseにかぎらず、ネット・ベネフィット・アナリシスでイシューを作る際の参考になるところは、二つのスタンスをラスト・レパッタルで用意できるということかなと思う。「自分たちで自分たちを守って平和になるか」もしくはDisadvantageのように「戦争を引き起こしてしまうのか」、やっぱりそういう話ってぶつかると思う。そういうときに自分たちは自分で守るべき、たとえ守れなくても準備すべきというネット+のスタンスがとれるので、ラストリパッタルで逃げやすいという落としどころのあるCaseという意味では良いCaseのかなと思う。いっしょとか何か他にある？

石嶋 宏之(以下石嶋)：僕はWESS¹¹のCaseがやらしいなとおもつて。

加藤：ああ、言うの忘れてた。俺の大好きなCase。石嶋：話しは凄く単純で、憲法があいまいだからいざというときに救助を送れずにDelayするというシナリオだった。Negativeの話もつきにくくて、やらしいくて、考え方として凄く上手いなという気がした。前期のWESSは考えたアナリシスをまわしているなというのがありましたね。

阿部：Negativeのイシューがつきにくいという他にどういう点がやらしい強さ？

加藤：あ、これは彼らのAffirmativeと対戦するNegativeに関してなんですけど、話自体はPKOでどこにでも出てるやつだから、INCの子が普通にCase Attackを出来ているとおもつてやっちゃう。そして2ACで自分の話をすればあっさり返ってしまう。これはNegativeのほうが悪いのかもしれないけど、、、。WESAに対戦したNegativeにも同じことが言えて、真っ向にwarを出して逃げられるという試合を見ました、、、あ、ちょっといい？自分た

¹早稲田大学政治経済学部4年生、2000年度早稲田ESAディベートセクション チーフ。

²獨協大学外国語学部4年生、2000年度獨協大学ESSディベートセクション チーフ。

³千葉大学法学部4年生、2000年度千葉大学ESSディベートセクション チーフ。

⁴福富商会(株)勤務、1998年獨協大学ESSディベートセクション チーフ、魁！是塾！！並びにSakigake ML創設者、暁代表。

⁵トーマツ・コンサルティング社勤務、1998年度早稲田ESAディベートセクション チーフ。

⁶上智大学法学部4年生、2000年度上智大学ESS 委員長。

⁷獨協大学外国語学部4年生、2001年度NAFA出版担当理事。

⁸早稲田大学英語部(Waseda University English Speaking Association)のこと。

⁹肯定側のケースを構築する際に、WESAや他のNAFAスタイルのディベート・チームの使う争点のこと。

¹⁰On Balance Analysis(DisadvantageをNegativeが出すことを考慮して、「～～と言う悪いことがおきたとしてもケースをとるべきだ」という議論)をあらかじめケースの中に組み込むこと。

¹¹早稲田大学英語会(Waseda University English Speaking Society)のこと。

ちの Case が特別であるならば、もっと Plan を大切に(一同拍手)。「Resolved; ナントカカントカ、A、B、C、D、、、」¹²って読んでいて、2ACで「Cross Apply D sub-point!!」といわれてもフローには残っていない。これじゃあ(Negativeの話は)切れない。もったいないし、議論の質もそこでぐっと落ちちゃうから。

2-2. Negative Strategy

2-2-1. Disadvantage と Case Attack

田島：Negativeの話をししましょうか。ほとんどの大学は Arms Race を出していましたねえ。

石嶋：その前に、全体として、今回は Negative のアナリシスが練られていなかったという印象がありますね。前でも出たけど、Disadvantage なんかつかないのにやっちゃうとか、Plank¹³とか確認しないで出しちゃうとか。例えば、Arms Race とか、解釈改憲 Counterplan が意味ないような Case に Counterplan を読み始めるとか、そういう Negative のいけてなさが所々に見えてたんじゃないかな。

田島：2000年度は Plan とレゾリューションが似通っていたから Negative のストラテが1つで済んだけど、2001年度はちょっと広めだから対応できてなかったのかな。

石嶋：今回の司法参加のレゾリューションでも同じようなことがいえると思った。Plan がスペシフィックになれば、誤審が増えるとか、国民馬鹿だからとかつかない。1つの解決策として、あたる前のプレパ段階で Plan の可能性を考える。そしてそういう Case にあたったときは、分からなかったら Cross Examination で聞いたり、Disadvantage がつくような聞き方をして自分の話をするとうまいかなという気がしました。

阿部：あとは、どの Plan にでもつくような思想のような話を Negative が出していくというようなストラテもありうると思っていて、前期であれば憲法を変えないことが Good なんだ、もしくは Pacifism 的な考え方を持つことが Good なんだという話。

Affirmative が自分の国を守ることが Good なんだという思想を出していることに対して、Negative にそういう柱みたいなものが在ればいいかなと思っていて、1つ良かったのは獨協のクリティークなのか Counterplan なのか¹⁴、要は非武装とか Pacifism とか。そうすればほぼ Plan に左右されずつく。全部の大学に対策するのが難しい大学はそういう柱をまわすっていうのもいいんじゃないかな。

田島：他に何か Arms Race を上手く回していた人なんかいますか？

阿部：上手く回してた人っていうよりも、もうちょっとこうしたほうが良かったんじゃないかなと思うところはやっぱり Uniqueness にあって、具体的には2つのことができたかなと。1つはやっぱり Arms Race の原因と Affirmative の憲法改正との原因がどう違うのかという difference を出すというところ。2つ目に、たとえ少ない Uniqueness が残っても Arms Race は避けなくては行けないという議論をする。つまり、Uniqueness が無いなら工夫は出来るような気はしていて、そういうことをすればよかったんじゃないのかな。

田島：そうすれば Case をテイクアウトして Disadvantage が残ると。

加藤：思ったのが、今後でも Linear の Disadvantage が出てくると思ったの、冤罪とか。今言ったように、少ないインパクトをエバリュエーションするのが、俺のころと比べてどうかじゃなく、あまり上手じゃなかったね。Decision Criteria とかという言葉になってしまったと思うけど、Arms Race とかでも、「At least risk will increase」ってみんなせこく伸ばす割に、インパクトは壮大にしちゃうね。「いやいや、君たちのインパクトは戦争が起こることじゃなくってそのリスクが増えることでしょう」って思う。だから人が全滅するっていう恐ろしさを強調することじゃなくって、国の政策としてそれは認められるの

かかっていう話をする必要があるんじゃない。Affirmative の話も一緒に、On Balance とか伸ばしたり、Inherency が凄くちっちゃくなったときにインパクトは別個にスピーチする。Link / Uniqueness、Inherency / Solvency を細かくスピーチする技術はあると思うんだけど、それに対応したスピーチを。

石嶋：具体的な解決策は分からないんだけど、Negative は Negative で「Asia doesn't fear Japan」、Affirmative は対して「Asia fears Japan」というのがあって差を見せられずにごちゃるからちっちゃくされたりするわけでしょう。そこで「One person's opinion!!」とか「Never shows actual voice!!」とかだけ。それで差を出そうとする姿勢は凄く良いんだけど、2つの対立する話があるときにこういう風な話になってるんですね、っていうのを言えてない。何でかっていうと、ゼロサムの考え方になっているような考え方になっているような気がする。例えばアジアは日本を恐れる / 恐れぬとか、Affirmative でもそうなんだけど、SDF に能力がある / 無いかだけに執着しちゃってほんと0か100なん

じゃないか。だから SDF の話だったら、「たとえ能力が無くともこれこれこういう理由で解決できる」と、相手のアーギュメントと共存して話を見せて欲しいなど。恐れているというのにはいろいろなファクターがあるということで、それを含めて自分の話はどうなっているのかという話があった方が分かり易いんじゃないかな。

阿部：今いっしょが話していたことに関係するんだけど、Uniqueness のエビデンスで、「Asia fear Japan」という話があるけど、それは漠然としすぎていて、例えば中国が Plan によって軍拡すると言うときに、「中国」とはただ1つのエリアであって、中国には人民共和国の指導者層もいるだろうし、普通の民衆が怖がっているだけかもしれない。中国の誰が恐れ

¹² NAFAスタイルでは、プランを提出するときに多くのチームが命令条項のところで議題を繰り返す。その後にはプランを読むのが速いチームがいて、それを皮肉った表現。

¹³ プランを細分化した条項のこと。Disadvantage がつかないかはこのPlankに左右されることがある。

¹⁴ 獨協大学は2001年度前期否定側に立ったとき「肯定側政策によって平和主義(Pacifism)を崩してしまうことが良くない」という議論を展開していた。

ているのかという話をしていければ、例えば Affirmative のエビデンスが中国の世論調査でどうこうって話だとしたら、Negative は民衆でなくて政府関係者の認識がこうだって話だということをクレームも含めて言えばに返しやすいんじゃないかな。それは SDF が強い / 弱いという話にも言えて、強い / 弱いっていうのは凄く相対的なものであって、ある大学は、何に対して強いのかという話が欠けていて、例えば PKF が海外で活躍するにはこういう技術が欠けていてそれで弱いなら分かるんだけど、漠然とただ「弱い」とかそういう話なんで何が強くて何が弱いか、そして何が弱いからだめ、という話をしていければもっと説得しやすいのかなあと思う。

加藤：この話伸びちゃいそうだな。そう、何が強いかわかかって話で、一辺僕が何かの間違いでジェネラル・コメントをやらせていただいたときに言ったけど、議論が凄く飛んちゃって、「こうこうこういう能力が無いから、紛争を解決できなくて、PMA なら分かるんだけど、アビリティが無いから PMA という議論の展開をするところがあった。それって飛びすぎちゃってると思うんだよね。今阿部君が言ったように、もっと掘り下げていけば良いんだろし、逆に、そういう漠然なことを言われたら、相手はそれに付き合うんじゃないかと、Specific に返していけば良いんじゃないかと思う。園城さん¹⁵もおっしゃっていたんだけど、SDF の話は逆に逆手に取れないかなあと僕も思っていて、経験が無いんだったら国連の一部として活動する際にそんな激務にはつかないだろう。最初は下っ端から、だんだん経験をつけて行くもんだし、国に経験があるからといって、個人に経験があるかといったらそうでもなく、だんだん偉くなるわけでしょう。今阿部君がいったように、そういうところを細かくやっていくといいと思う。

石嶋：そこまで細かく考えてくれる Debater ならまだ良いんだけど、そこまで行かない場合もあったね。Affirmative だったら紛争を解決することに一番の重きがあるわけで、SDF に能力があるというのは直接的な Advantage じゃないんだけどそこに終始してしまうことがあった。Negative も Negative で「SDF has no ability」ということで終わってしまう。だけど、Affirmative は Affirmative で、「こういう能力があるから」SDF は紛争を解決できて人を救える、というところまでいって利益が出るわけであって、話が下の段階で終わってしまっているような気がした。Disadvantage もそうで、アジアが恐れている / 恐れていないの話をして、Impact / Link の Uniqueness を削るのかという核心に行く前に終わっちゃってるという印象が多かったのも、もっと全体を見たら良かったんじゃないかな。正直、Arms Race に関してはシーズンを通してあまり良くわからないという印象があって、それは議論が発展しなかったからじゃないかと思う。いつもでも同じような議論を出して、同じように反論をして、同じように再構築するというプロセスがあったからじゃないかな。

加藤：上の人から見たら俺らのときもそうだったんじゃないかと思うけど、その俺らが見ても今そう思うところもある。

石嶋：エビデンスもほとんどモデルから脱していない、ということもあったと思うから、ほんと分析が薄いという気がしてね。エビデンスが全く換わらないと分析が薄いままというところがあって、それは先輩とかジャッジさんにそういわれたところもあったと思うから、もう少し今期は議論に工夫するなり、スピーチを練習するなりしないと、という気はしましたね。

田島：マン・パワーが少ないところとか、いわゆる中堅スクワッドが仕方なく Arms Race を回し続けるという悲劇的な一面もあったからかな。

加藤：同じイシューでもいいと思うんだけど、エクステンションとか、そういう細かいところとかも変わってなかったところもあった。うちはマン・パワーがそれほどなかったから、どんどん新しいイシューを出してやっていくというよりも、同じ議論を使っていたんだけど、俺から見ても、ちょっとでも違う工夫があまり無かったかなあと思う。そういうのって一言で言うとリサーチとか、気合、、、

田島：気合！

加藤：気合だよ、だってリサーチすんのだって気合だしさあ。いや、もちろん気合だけじゃだめだよ。

石嶋：リサーチの仕方もちょうと問題があると思うのは、さっきの Affirmative のところとも絡むんだけど、Affirmative の Plan とかが凝っている所に対して、Disadvantage のつかないとか、ほんとうにやるのがなくなっちゃうとか、ファンクションしていないディベートをしちゃう場合があった。理由としてはプレストの仕方とかいろいろあると思うんだけど、リサーチに関しては僕らの時代は凄く恵まれていると思う。インターネットとかあるし、どこの図書館にもコンピューターの検索システムはあるし。それにもかわらず、リサーチの幅が狭いとか、議論の幅が狭いとかっていうのは本当にもったいない。いろいろな雑誌とか、記事とか調べられるのにモデルから脱却できなかったっていうのは、ちょっと厳しい言い方もしれないけれど、リサーチがたりないんじゃないかと思う。それはスクワッドが小さいとかマン・パワーが足りないとかっていうレベルじゃなくて、初期段階でやるべき作業をやっていないからじゃないかな。

田島：リサーチのやり方さえ知っていれば出来ることかな。

加藤：なんでもかんでも新しいものに手を出していたら間に合わないと思うけど、工夫することは出来るかな。例えば一枚のキー・エビデンスを見つけて変わることであってあるわけで。そういうのがあると「悲しいよね」、とかバロットを書いた後に言ってしまうんだけど、、、ああ、別に文句だけ言ってるわけじゃないよ。

石嶋：(阿部君に)WESA とかはどんな感じでニュー・イシューとかやってるの？

阿部：ニューをこころ出すっていうのは、良い面も多い反面、悪い面も結構多くて、シーズン通して回るマテを作っていないから変えざるをえないという面もあって。

¹⁵ 園城浩行 埼玉大学 OB 現在カシオ計算機(株)勤務。

加藤：ニューに対する対応に関して松村君¹⁶は上手かったね。

田島：松村君は良かったね。

石嶋：TIDL¹⁷のファイナルはISの今期を象徴するような試合だったかなあ。

加藤：馬鹿みたいに絶賛してしまった、、、。首を振りすぎ、、、

石嶋：ここで1つ提起したい問題があって、強い大学というのは、Negativeのバーデン・シェアリングがきちんと出来ていたかな。TIDLのファイナルとかも、松村君がDisadvantageをやりつつ、Case Attackをやりつつ、高瀬君¹⁸が上手くCase Attackをやりつつ、ターンもやりつつ、Topicalityもやっていたような気がする。お互いが凄くかみ合ったストラテジーを取っていた。逆に今問題となっているような所ってというのは、1つしかメインのイシューが無いから2NCだけがファンクションしているような場合があった。例えばCounterplanをやるにも、Disadvantageをやるにも、2NCがばーっとやっちゃって、1NRがファンクションしていない。そしてDisadvantageも発展させていないから切り所が同じ、と、その辺のスクワッドにはNegativeのストラテジーが軽視されていたかな、という印象がありますね。そこを変えてくれることを今期は期待したいかな。

Burden Sharingしようという姿勢、ということです。加藤：最悪、2 Voting Issue 出来ないようであれば、片方のアーギュメントにかかわることを心がけて欲しい。例えば、ケース・フリップって得てしてInherencyにかかわるじゃない。2NCがまあ8分間で立てたとして、1st negative rebuttalで全然関係なくて立っていないTopicalityとか、PartialなPMAとかやるんじゃない、Inherency Attackを引っ張れば、、、という試合があった。二つ出来ないならせめて2NRで有機的に一つになるような話が欲しかったかな。そういう意識とかよりも、ただ「別のものをささなきゃ」ということでPMAとか出してもあまり意味無いことが多い。

田島：1NRは時間があるので考えてプレパしましょう、ということです。

加藤：プレパ天国だよな。いいなあ。

2-2-2. Counterplan

田島：ではCounterplanに関して話しましょうか。改憲解釈のCounterplanが割と沢山出てましたね。そのアタックですね。2ACのアタックの改善点なんか何かあれば。

加藤：単純に、みんなが言うことなんだけど、CounterplanってInherencyをチェックするものじゃ

ない。さっきいっしょも言ったことなんだけど、Solvencyに関してみんな1か0かを追い求めるから、CounterplanとAffirmativeのPlanどっちがちよつとでもスーペリアーかが出せるといいかな。だから例えば、「CounterplanはAffirmativeのInherencyを全くCaptureしてません、だからSolvencyがありません」じゃあ無くても、言い方を変えて、「Affirmativeのほうがより議題に近づいていて suitableだ」とか、「早い」でもいいし、そういう細かいスペリオリティーがあったらよかったかな。「Therefore, counterplan never stands」というのが結論なところがあって、そう言うより、「Therefore, affirmative plan is superior」で十分だよな。そっちの方が現実的な議論だなあ、と思う。もちろんCounterplanが立たないという議論もどんどん出していけばいいと思うんだけど、そっちのほうばかりに目が行って、凄く極端に聞こえる。

田島：それはCounterplanに対してPMAを出すとかよりも、Inferiorityという形になると思うんだけど、「これが悪いこれが悪い」って差を見せていけという事？

加藤：そうだね。だから、Counterplanに対して、個別の返しをするだけで、AffirmativeのPlanと絡めていなかったところがある。やっぱり比較して欲しいところだね。

田島：阿部君はどうですか？

阿部：今回の解釈改憲Counterplanというのは、AffirmativeのInherencyの出し方に問題提起をしているな、要は、条文を変える事からくるAdvantageをAffirmativeが出していない、と思った。CounterplanのSolvencyに対しての返しは2つあって、1つはCaptureされないAdvantageにする、2つ目はCounterplanにDisadvantageを出してつぶしていくというやり方がある、、、、どっちが良かったんでしょうね、石嶋君。

石嶋：僕は阿部ちゃんと同じことが言いたくて、今回Affirmativeがいけてなかったのは、こういうCounterplanがあると分かっているながらも、CounterplanでCaptureされないようなAdvantageを出していない、つまり、ここの部分はCapture出来ない、というところを見せることが出来ていなかった。今回で言えば憲法を変えないとCapture出来ないAdvantageにフォーカスして欲しかったなと思います。これは全体の印象と絡んじゃうんだけど、今回は憲法を変えるという結構ドラスティックなアクションを要求するレゾリューションなのにも関わらず、憲法改正からくるAdvantageを話し合うことがあまり無かったと思う。凄くフィロソフィカルかも知れないんだけど、そういうCounterplanの1つのアプローチとして、CounterplanじゃCapture出来ないようなAdvantageを出すのはいいと思う。逆にNegativeだったら、変えちゃうといけないよ、みたいな議論を出して、それをCounterplanのスペリオリティーにするような議論を出すと、良いバランスでスピーチが出来ると思うんだよな。

加藤：戦後五十年世界のシンボルとなってきたものを崩して極地の海賊をやっつけようとかいっても、それをAdditional Advantageで出せば分かるんだけど、実はメインだったりすると心に響かないときもあ

¹⁶ 松村草哉、一橋大学経済学部3年生、2001年度一橋大学国際部ディベートセクション チーフ、TIDL 優勝者。

¹⁷ TIDL(Tokyo Intercollegiate Debate League)は関東地区でNAFAスタイルのディベートをする人達にとって、前期最後の大きな大会。このファイナル・ラウンドで、肯定側にたった明治学院ESA(MESA)はいわゆるニュー・ケースを出した。

¹⁸ 高瀬純平、一橋大学社会学部3年生、2001年度一橋大学国際部ディベートセクション、前述の松村君と共にTIDL 優勝。

たかな。アカデミック・ディベートが実際世界を反映しているかは別として、実際国会とかで憲法を変えようという話をしているときに、まず海賊がメインになることは無いかなあと。(笑) それだったら、国会で「海賊に対しての法案を作ろう」って話になって終わりだと思うんだけど。それで、「だから憲法を変えましょう、That's all!!」みたいなスピーチがあった。いくら小泉でも、その変革は無いだろう、みたいな所があって。

石嶋：悪い話じゃないんだけどね。Counterplanの話に戻すと、まだ最初の KUEL¹⁹とかだったらわかるんだけど、それが JNDT、TIDL とかでも続いた所を見た。簡単な議論とか、エビデンスを1個用意すればそれで返るのに、そういうアプローチを取ってなかったのはちょっと。

加藤：そう、後は全部一緒なんだからねえ。

石嶋：これが Capture 出来ないんだから、Affirmative の Plan を取ったほうがいいよね、というスピーチは出来ると思うんだけど、、、。まあ、どんどん掘り下げていくと、また同じところに戻るんだよね。プレバの仕方とか、プレストの仕方とか。レゾリューションのもっと本質的な部分に目をつけてリサーチをすれば良いと思う。

田島：やっぱりそういう、「Advantageは何」、とか、「Disadvantageは何」、とかいう枠組みで考えちゃうのかな。

加藤：ストラテとかにもその辺は関わってくるのかな。Case Attack の No Inherency が Disadvantage の Link を切っている、という試合を見たけど。Disadvantage で「North Korea cause war!」と言っておいて、No Inherency では、「North Korea has no motive to cause war!」、、、、ああ、そうなんだ、みたいな。そして Affirmative は Inherency を守って Disadvantage を切りにいってしまう。

2-2-3. Topicality

田島：ではですね、Topicality に関してお聞きしたいんですけど。Affirmative 側に足りなかったところはどこかなと思って。Topicality にやられたチームも多かったのではと思うので。

加藤：Affirmative はなんか Negative の言うことを信じ過ぎているところがある。ただ「Why?」しか聞かなかったり。ミートの話なんだけど、たとえ Definition と Interpretation がかみ合っていたとしても、その Interpretation だけとは限らないでしょう。

Interpretation が Negative から出された時点で、それしかないんだ、と Affirmative は思ってしまって、ミート・アーギュメントが出来なくなる。

阿部：それはそうだね。1つの Definition から導き出される Interpretation がいくつもあって良いし。

加藤：有名な IS の Topicality は「for settling international disputes」が侵略戦争も含む、というやつで、それでもそうだけど、実際エビデンスを吟味

したらもっと他のことも言えたんじゃないかな。Affirmative は結構相手のクレームどおりにしか取らなかつたり、そこのエビデンス・チェックは余り無かつたなという印象があるかな。

石嶋：IS の Topicality だと、「Use」だけで、「Threat」が含まれないような気がするんだけど、、、。

田島：そこは「or」かなあ。「possibility」として取るか、「どちらかしかない」と取るか。

加藤：「or」でもアプローチは取れたということで、いろいろな方法がやっぱり Affirmative には残されていたというわけで。

石嶋：このレゾリューションだと、「or」は二つ一緒、と捕らえるのが自然なんじゃないかな、、、? コンテキスト上で。並列してるのかな。

田島：そこは憲法って長い間使えるようにしなきゃいけないから、とりあえず可能性を示唆するものならいいのかなと思ってた。

加藤：そこで明海が出していた Definition が凄く良く、「時と場合によって使い分けられる」ってやつだったね。常に両立とか、オルタナティブっていうんじゃないで、こういう場合にはこう使えるってやつで、とりあえず絶賛しておいた。

石嶋：Topicality の議論は去年ほどお盛んではなかったな。でもとりあえずの返しがあつたり、ディフィニションにいいのが出てくるというのはそれなりのリサーチをしていたということかな?

田島：それもあつと思うけれど、Negative から出すのは上位校が牛耳っていたという印象もありますね。

加藤：そうだね。辞書ってみんな持ってるし、各大学の図書館に絶対あるから、それと同じでネットでもリサーチをちゃんとしていけばいいと思う、、、。まあバクったりするのとかは置いて。

石嶋：Topicality のパラエティーを増やすのであれば、リーガル・ディクショナリーとか、今回だったら特に、司法に関してだから、そういう辞書、あるいは、アメリカとかイギリスのロー・レビューとか取ってきたら本質的な Topicality が出来るんじゃないかな。

加藤：そうだね。文脈とか良く吟味してると思うし。何で今回はこういう文脈/辞書じゃないとダメかという話が出来れば Reasonability の人でもいけるだろうし。

2-3. 上手な Debater

田島：ということで、前期こいつは上手かった、という Debater はいましたか? 松村君はさっき出ましたか。

阿部：僕は大山さん²⁰がまじめな話うまかつたなという印象があります。(笑) いや、獨協の人がいるから何か変な感じなんです。1つ目は、彼女自身とは離れるんだけど、やっぱエビデンスが言ってる。何でかなと思うと、リサーチのソースが、ちゃんとした海外の論文からとってきているっぽくて、アーギュメントの質が高い。2つ目は、プレゼンテーションが素晴らしいというのがある、いっしょを髣髴させるところがあって、ジャッジの反応を見るとこ

¹⁹ 関東学生英語会連盟(Kanto University ESS League)の主催する「春の二人制ディベート大会」のこと。このレゾリューションでは初めてのメジャー大会で、4月の中旬から下旬に開かれる。

²⁰ 大山彩子、獨協大学外国語学部 3 年生、春 KESSA 優勝者。

ろがいいんじゃないかな。3つ目は、これは悪いことじゃないんだけど、男勝りのパワーがある。例えば2NCでも1つのオフ・Caseをがっちりと2コンするし、その後で的確にCaseの逃げ所をつぶす。2コンしないときでも、KESSAのファイナルみたいにCase Attackをする柔軟性がある。これはまあなんて言うか、パワフルじゃない、って思った。

田島：ということで、他の人はどうですか？

石嶋：僕が挙げたいのは、東北の岩野さん²¹。僕が見た試合のほとんどは上手かったですね。何が上手かったかという、相手の議論と自分の議論の差を出すのが上手くて、カードアタックとかも最初は雑に見えるんだけど、1NRになって、そのカードアタックを利用しつつ、ここまでしか証明してないからこうこうでだめですよと、その先を言ってる。スピーチもきれいだし、アーギュメントの組み立ても上手いという気がしましたね。そんな派手なことばやってないんだけど、細かいことの差を出すプレゼンテーションが上手いかな。ジャッジを見てくれるし、スピーチも聞き取りやすいし、ジャッジをやっている身としては凄いいいかな。

加藤：後、熱心だね。ディベートを凄く紳士に受け止めていて、リフレクも充実。

阿部：後、個人的に姫水杯²²に行った時なんだけど、本当にDebaterが熱心に聞いてきてくれるから、くらいについて聞きに来ようとする姿勢が凄くて、まあ関東のDebaterが聞きに来ない訳じゃないんだけど、聞きにこないDebaterはもったいないなと思って、まあ、どんなジャッジからも少しは得る物があると思うし。

加藤：とりあえずリフレクに行って、そいつの考え方を覚えとけ、って言うよね。技術とかは先輩から学べることとかぶっちゃうから、そういうこと以外にも、その人の考え方と直に触れられるのってやっぱりバロットだけじゃなくって、3リバでもそうかと思うんだけど、文句を言いに行くだけじゃなくて、今後の試合に生かせと。合わないジャッジも、合わない諦めるんじゃないで、どう合わないんだろと努力してやっていくのも重要な。僕はリフレクに行くのは半分くらいその目的があって、そこから盗もうとしてましたね。

阿部：後お勧めしたいのは、最近のジャッジって、バロットにメールアドレスとか書いてるじゃない。で、そこからメールに送ってきてくれたことが何度かあって、書面だと、後々残って見返したりすることが出来るし、ジャッジとして説明が足りないところももっと説明できると思うし。脅迫はいけなけど、メールとかは本当に出したらいいんじゃないかなと思う。絶対返ってくると思うしね。

加藤：俺も岩野さんから一辺貰って。

石嶋：素晴らしい！

加藤：そのときは熱心だなあと返したんだけど、たぶんジャッジはメールを貰うのが嬉しいんじゃないかな。みんなどんどんやろう、ということです。あれは嬉しかった。

石嶋：僕も幾つか貰ったんだけど、凄くレスポンスフルになるね。こういうふうなフィードバックがあるということ意識すると、バロットもそれなりにいいものを書かなければいけない、となると思うし、リフレクもちゃんとしたことをやらなくてはいけない、と思うし、ジャッジにいい影響を与えるね。

加藤：これも偶然かと思うんだけど、僕も一度大山さんとメールのやり取りをして、やっぱり上手なDebaterとして挙がっているっていうことはそういうのって比例するっていうことじゃないかな。

2-4. Japan-US Exchange Debate

田島：ということで、今期ある意味で一番上手いDebaterだったと思うんですが、SEED²³の後にディベートをしてくださったアンディーさん²⁴、アンさん²⁵と、義典さん²⁶、大輔さん²⁷がいますね。ここでどうこう言うのはおこがましいかもしれないんですが、その試合を皆さんどうご覧になりましたか？

加藤：飽きさせないよね、基本的に。

田島：Debaterが学べることってありましたか？

石嶋：2つほど僕はやったほうがいいかなあと思うことがあって、まず、エビデンスが言い過ぎている。怖いくらい言っていて、言ってるエビデンスっていうのは、どうがんばっても言っていて、相手からいちゃもんつけられても、自分のスタンスを守りやすい。凄くゆっくりしゃべってくれるから言ってるな、というのは分かると思うんだけど、そういう風に、言ってるエビデンスを見せるところが、真似てほしいというか、それを利用して、自分のスタンスを見せて欲しいかな。後、2つ目に、アーギュメントの出し方が上手いなと思った。今回思ったのは、ターンとか多用して、積極的にぶつけること。これはSEEDの後のExchangeじゃないんだけど、獨協でExchangeをやったときに思ったのは、Contention 3にターンを一杯出して、プレッシャーをかけていったのね。そういうのが日本に余り見られなかった事なんじゃないかと思う。日本の人は、大体がContention 1、2、3にボコボコとやって、ターンを1、2個出す、みたいなやり方だけど、向こうはクルーシャルなターンとかをどんどん出すというパワフルなストラテだったから、それは真似て欲しいなと思いました。

加藤：アンさんがそうだったけど、やっぱり攻めてるっていう印象があったね。別にターンだけじゃなくって、エビデンス無しの議論も、相手に対しての話

²³ Sophomore Educational and Exchange Debate 関東で行なわれる前期の最後の大会。2年生用の大会としては最高レベルの大会の1つ。

²⁴ Andrew Peterson, the University of Iowa の4年生、2001年度Japan-US ExchangeのUSチーム代表。2nd Negativeを勤めた。

²⁵ Ann Marie Todd, the University of South California 大学院生、2001年度Japan-US ExchangeのUSチーム代表。1st Negativeを勤めた。

²⁶ 佐藤義典、MBA, the Wharton School of the University of Pennsylvania、2001年度Japan-US Exchangeの日本チーム代表。2nd Affirmativeを勤めた。

²⁷ 石井大輔、東京大学大学院生、2001年度Japan-US Exchangeの日本チーム代表。1st Affirmativeを勤めた。

²¹ 岩野久美、東北大学法学部3年生、2000年度東北大学ESSディベートセクション チーフ。

²² 山口大学の主催する大会。6月第4週目に関われる。

に対応しきれていて上手かったね。そうやって、相手に攻めるっていう姿勢を出していくと、自分の話じゃ返っていない、っていう場合も分かるようになるんだと思う。

阿部：僕は義典さんと石井さんと試合の3日前くらいにホーム・トゥー・ホームをさせてもらって、義典さんに Case の構造についてうかがう機会があって、その Case についてお話ししたいんですけど、あの Case に関しては2つ見習う点があるかなあと思っていて、1つは Case にコンセプトがあるということをお願いしたい。あの Case のコンセプトって、憲法がないとストラテジック・シンキングが出来ない、そしてそれが出来ないことがすべての諸悪の根源としている。そしてストラテジック・シンキングによりインパクトが解決するという1つの柱があったことだと思うんです。そして、柱の例として拉致問題とかそういう話が出ていて。そして、柱の何がいいかというと、拉致問題が解決する、解決しないというよりも、拉致問題はストラテジック・シンキングがないことの example であって、本質はそこにある、みたいな話が出るから、細かい、助けられる/助けられないじゃなくって、それプラス・アルファがあるんで、議論しやすい Case に仕上がってたんじゃないかなと思うところはある。2つ目に、1本の柱を持ってると何がいいかっていうと、獨協とかもあったけど、Utopian Solvency みたいな感じで、「すべての諸悪の根源がそこにあるから」という理由で Disadvantage もそこに持っていける。例えば小泉首相の構造改革の Disadvantage を²⁸出されても、構造改革が出来ないのはストラテジックじゃないから、だから Plan が解決する、という1つの議論を中心に全てターンしていけるという姿勢は Affirmative としては凄く強気なのかなと思って。

田島：コンペティティブだね。

加藤：俺この NAFA セミ受けようと思って、これと大輔さんの「昔のスーパー・ディベーター」のやつを取るよ。

石嶋：向こうの Debater は使い分けが上手くて、Disadvantage も Disadvantage としてだけじゃなくて、2nd Negative でそれが PMA になったり、Inherency take-out になったり、パラエティーに富んだ使い方をしていて、1つのイシューを Flexibility を持って使えることが、凄いなと思いました。アンディーの Constitutionism²⁹とか、獨協でやったときは、それが Case をフリップする形になっていて、1つのイシューからいろいろなファンクションが出来るようなスピーチは上手いなと思って。

加藤：僕は園城さんと見ていて、園城さんも言ってたんだけど、みんな素直に思ったことを言ってるなという印象があった。これは別にたいした議論じゃなかったんだけど、「憲法がクリアーになるから良い」というのにも、「武力的にクリアー」になるのか、「平和的にクリアー」というのを考えていない場合があった。アン・マリーさんは、「向こうの話

は平和的にクリアーになるわけじゃないじゃない。武力を用いるわよ、ってクリアーになって、信用を勝ち取るの？」っていうことを言っていた。俺も半年間ずっとおかしいなと思ってたんだけど、「普通に聞いておかしいな」って思うところを、出して、そういうところが要所要所に見られて、エビデンスのいいのももちろんあったけれど、個人のクリティカル・シンキングの能力というのかな、そういうのも確立されてるな、と思うところがあった。石嶋：あ、後もう1つ、向こうは当たり前だけ英語が上手くて、Entertain というか、Communication の仕方を分かっている、という感じがした。日本だと、ただ直立不動でしゃべってるという印象があったけれど、向こうの Debater は、例えば、Facial Expression するとか、声を大きくするとか、Audience 全体を見ているとか、凄くコミュニケーションが上手い。説得的にしゃべることを知っているなという印象がありました。コミュニケーションの授業でやったじゃない、そういうことすると第三者敵に効果的に伝わる、とか。

田島：うん、はいはい。

石嶋：そういうのと、別に見習えと言うわけじゃないけど、人を説得する、という観点から見ると1対1でばーっとしゃべるだけよりもそういう方法を学んでもいいんじゃないかなという気はしましたね。見ていて飽きなかった。

加藤：人間らしい。

田島：人間らしい？という？

加藤：人と人とのコミュニケーションっていう感じがした。そういうのが無いのは寂しいし、だからジャッジをするときに頷くようにしている。直立不動でスピーチをする人も普段は良くしゃべってるし、普段は、身振り手振りを交えたり、「違いますよー！」(大きなリアクションを取る)とか言ってるわけじゃん。でも、ディベートになると、「NO」(顔を硬直させて)とか言うのは、いいのか悪いのか、勝ち負け以前に自然にやって欲しいと思うな。まあ、フォーマルな場所だから一応のマナーはあるけど。人によって、淡々とスピーチしてほしいというジャッジさんもいると思うけど、自然に振舞うのは、それこそ自然な姿だと思うんだよね。

田島：やるほうも楽しいと思うね、、、そんなところで、前期の反省を締めくくってよるしいでしょうか。

石嶋：松村君は上手かったね、、、ええと、大体自分の言いたいことは言った気がしますね。

3. 今期の展望

3-1. プロポジション決定会

田島：ということで、後期の展望に行きたいと思えます。まず、プロポジションの公聴会にいかれたお二人(石嶋さん、加藤さん)に聞きたいのですが、プロポが決まる経緯とか、行って見た感想なんかあればお願いします。行ってみてどうでしたか？

²⁸Generic Disadvantageの1つ。2001年度のアメリカーン・ディベーターの方々が出していた。

²⁹2001年度のアメリカーン・ディベーターの方々が出していた Disadvantage。肯定側政策に伴い憲法の尊厳が失われるという内容。

石嶋：まず、公聴会³⁰という制度について。公聴会という制度があって、そういう風に、どうやってプロボが出来るのか、プロボ委員がどうやってプロボを厳選していくのかというプロセスが見えるので、参加してみてよかったなという印象です。だからさ、いろいろと文句とかあるかもしれないけれどね、「上が勝手に決めて」とか、「意思が反映されていない」とか、そういう風にいる人がいるんだったらそういう人には参加する場所があるよ、というのを知っておくのもいいんじゃないかな。僕もプロボがどう作られるのかを知らないから初日興味本位で行ったという感じだったんだけど、結構話し合いも盛んで、一つ一つ吟味してリサーチしてみんなで良いか悪いかを話し合ってるわけであって、決して上の圧倒的な力で決め付けてるって分けじゃないんで。そういう風なプロセスが知れたのは良かったんじゃないかなと思いますね。

田島：加藤君なんかどうですか？

加藤：単純にいうと、行ってよかったなという感想です。

阿部：いやもう、熱いっす。

加藤：いや、ほんとに。何が良かったかという、単純に背景を知れたとか、リサーチできたとかいうことじゃなくて、自分の中での勘違いというのが取れた。意識改革が起きた。今ジャッジとしてやらせてもらってるけど、現役終わってからもそういう出来事があって、それが嬉しかったかな。

田島：意識改革という、、、、？

加藤：そうだね、汚い言葉で言ってしまうと、プロボ批判。単純に昔に比べてつまらなくなった、とかいう声もあるって聞いて、僕も今までは、「何で前回落選したプロボが残ってるんだろう」とか思ってたんだけど、参加することで、どういうプロセスでそれが残されていたのかを知ることが出来たし。それで、単純に残ったから使い回しされているんじゃないことも分かったし。あと、これは知っとくべきことだと思うんだけど、JDA プロボポジションは単に学生だけがやっているものじゃなくて、パブリックな中や、日本語ディベートでも使われるためにやっているからね。ぱっと見て議論しやすいから、とか、Advantage、Disadvantage がつくりやすいからとかじゃなくて、ごく一般的な議論が良く伸ばされることもある。そういうことで、首相公選が Daily Yomiuri³¹とかでも出てきたり、そういうのを考慮してもプロボが決まることが分かった。あと、そういう人達の極論を言うと、「プロボ委員会は怠慢だ」というもので、実際行って、そうじゃない、と思ったね。やっぱりみんなちゃんとリサーチまでして考えているのもびっくりして、実際首相公選とかもう一回見れて良かったかな。そこでいっしょがいったように、「みんな来れば良いじゃない」ってなるんだよね。でも実際今の段階ではみんな垣根を作っちゃっていて、それって自分たちのせいだと思うのね。

でも実際俺も行って見て最初のほうはドキドキだったんだけど、そんなものはなかった。凄く喜んでくれて、喜んでくれると俺も嬉しいし、それでやっぱりもっと現役の人が来てくれればなあと思いましたね。今までみんなと同じ考えだった僕が変わったんだから、他の人も参考にして欲しいよね。

田島：あと今回の場合、積極的にプロボ案を出して欲しかったよね。

石嶋：ああ、それは(プロボ委員も)言ってたね。公聴会にいったりして、こういうのはどうですかというアイデアを出すことは可能らしいんだ。だからもし「こういうプロボが良いのに」って思っている人がいたら、公聴会とかに行って、こういうのはどうですかって言って、出して欲しいよね。

加藤：実際荒川³²も UN のやつとか出してたしね。

田島：僕も NAFA でプロボを出そうとリサーチとかしたんですが、3年ちょっとしか経験がなかったの、アイデアとして数が出るは出るんだけど、どんどん潰れていって、決めていく過程が少しでも分かったから、今までが浅はかだったなあと思いましたね。、、、批判は止めよう、ということです。

加藤：っていうか、考えた結果最終的に批判だったらしょうがないと思うのね。批判はやめよう、っていうより、何か最初に自分でやってから物を言おう、っていうことかな。それは自分に対する戒めでもあるんだけど。

3-2. レゾリューションの実際の中身について

田島：ええと、皆さん、リサーチは進んでいるでしょうか。ここではレゾリューション分析をしたいと思うんですが、実際大会に出る予定があったり、後輩のリサーチを手伝ったりなさっている方がいるので、話して差し支えない程度に、というか、全体的なレゾリューションの分析を少しだけしようかな、と思うのですが。

阿部：大きな捕らえ方をすると、これは司法の問題だと思うんですが、司法のリサーチをするのもいいけど、例えば三権分立、行政、司法、立法の中で Affirmative の Plan を捉えて、その司法が Affirmative の Plan によってどう変化するとどう他の2権に波及するかとか、周辺部分から見ると良いんじゃないかな、という気はします。例えば、原発だったらみんな原発について調べるんだけど、例えば原発が、日本とか、アジア、とか、世界の枠組みの中でどういう役割を及ぼしているのか、っていう周辺部分から見て考えてみれば良いんじゃないかなって気はします。

田島：小泉首相の司法改革とか、行政区分からの役割、みたいだね。

石嶋：そういうリサーチをしている人がいないんだよね、みんな司法、司法で行っちゃうとつまらなくなるかもね。

加藤：「陪審制」っていう本だけを読んでやるよりも良いね。

³⁰今年度は、JDA理事の瀬能和彦氏(上智大学ESS OB)が委員長として、JDA論題検討委員会を開催し、関係するMLを通じて、ディベーターの参加を呼びかけた。

³¹Daily Yomiuriの主催したディベート大会。決勝戦は社会人の方々の見に来て、スタイル、フォーマットもトーナメント・ディベートとはひと味違う。

³²荒川知之、上智大学 ESS ディベートセクション 2001 年度チーフ。

阿部：あとは、国民投票制度のディベートを2年生の時にやって、その時に非常に参考になったのが、日本ではやられていないけれど、海外でやられている制度の例だと思っから、そういう事例を調べていけば、事実に基づいているだけに、強い議論が構築できるかなと。そういう事例は大学の研究紀要とかにも載っているんで、そういうのを大学の図書館で調べるのもいいのかな、と。

石嶋：陪審だけだとなかなか狭い、というか、限られているものだから、「陪審制」という本を見ても同じようなことしか書かれていなくて、お金がかかるかとか、どっちが頭が良いかとか、時間はどれくらいかかるかとか。

加藤：聞いたことがあるような議論だな(笑)。

石嶋：それがとられたら、日本がどう変わるのかというところまできちんと証明するのはなかなか不十分で、そこで陪審制が全体の中の一部だとすると、さっき阿部ちゃんが言ったように、バランスが取れるとか、司法の位置関係が代わるとかという議論をすると面白いんじゃないのかなと思って。あと2つ目は、海外の事例とか、英文ソースとかは役に立つなと思って。当たり前だけど、例えばアメリカだとかなり前から導入されているわけで、それに基づいて書いていてくれるんで、そういう風なソースを使うことをお勧めします。後は、まだ断片的な知識で申し訳ないんですけど、州とかでシステムに微妙な違いがあったりするんですよ。全員一致で採決される所とか、多数派いれば採決されるとか。他には国ごとだと、参審制やってる所と、陪審制やってる所とか。だから日本でどういう風な制度を参考にすれば良いとかをリサーチしておけば便利だと思う。

加藤：ただここで、「Just assume United States, never assume United Kingdom」とか、どう違うのか説明してくれないのも困るけど。

石嶋：今回それが結構重要になってくるっぽくて、それを説明して欲しいよね。アサンプションが違う場合はいくらでもあって、人種問題とか関係ないことを話したり、参審制の Plan に陪審制の攻撃をしたりとか。まあそういうのはちょっと。

加藤：それだけじゃなくて、エンピリカル・アナリシスはいろんなのに対応しておくとも良いかな。あと、それに付随するセオリーのカードもあるとも良いね。何でこのエンピリカルにはこのセオリーを使うのか

を自分で意識付けしていくと、自分でも気付くから、そういう話を大切にしよう、と思うんだよね。

阿部：後は、前でいったけど、今期も柱を持つと良いということは言えて、開放しようという考えに対して、プロフェッショナルな人達がやっていくという考えを出すとも良いと言えると思う。それが言いか悪いかは別として、自分たちの考えを出すのには良いかな。

石嶋：今リサーチしている段階では結構レゾリューションが広そうで、結構いろいろな Plan が出そうなんですけど、そういうシーズンになることを願いたいですね。

加藤：後は、阿部ちゃんも言ったけど、フィロソフィカルな話が出来ると思うから、実際憲法でもしてたところはあるし。ただ誤審が増えて人々悲しむ、とか、デッド・ボディー・カウンティングとかの算数だけじゃなくて、そこにアマチュアを入れる意義っていうか、思想背景を。そういう意味で本質に迫った議論を期待したいですね。

石嶋：そうなんだよね。今までで何でやられていなかったのかっていうのを見ていくと、意外に文化的な背景とかなどにも問題があって、必ずしも冤罪とか、そのせいじゃないんだよね。そういうのを探っていくと、逆に導入されるとそれが引き金になって、問題が出てくるとか。そういうのを調べていくと、いくらでもそういうフィロソフィカルな議論は作れるかなという気はします。

加藤：裁判員がやっても陪審員がやってもどっちでも死刑になる場合、特別な立場の人が人を裁くべきなのか、それとも、同じ生活を営んでいる人が人を裁くべきなのか、それってネット・ベネフィットじゃないけど実際そういうのが問題になっていると思うんだよね。そういうのを考えてみると面白いなあ、と思う。

田島：そうだね、そこで上手く should、should not っていう議論が見たいですね、、、是非みなさん試合に出ていい議論を見せてください。あと、ジャッジとしてもコミュニティーに貢献して頂ければと思います。ということで、みなさん今日はどうも有り難うございました。

一同：有り難うございました。

(あかつき / NAFA 出版会)



話し合う3人。